

資料

基礎ゼミナールにおける学生の理解と今後の課題

— 学生のアンケートの分析より —

Student's Comprehension and Problem to Be Solved in Basic Seminar Based on a Questionnaire Survey

小口 多美子 加藤 光寶
Tamiko Oguchi Mitsuho Kato

獨協医科大学看護学部
Dokkyo Medical University School of Nursing

要 旨 本稿は、基礎ゼミナール終了後の学生の感想・意見を基に、学生の理解と、問題を検討し、次年度からの基礎ゼミナール運営の資料とするものである。本学部1年生99名を対象とした、自由記述の感想・意見により、58名の有効回答を得た。主語と述語から成る文章を1記録単位とし、79記録単位を得、内容の類似性に従い分類し、カテゴリを命名した。

その結果、理解は、【アカデミック・スキルの習得】と、【グループワーク学習への関心と困難さの自覚】の2つのカテゴリと10のサブカテゴリが得られた。それは、[発表への興味・関心の増大][プレゼンテーション・スキルの習得][テーマ設定の難しさ][課題を追求することへの関心の増大][学習内容の満足][文献検索・情報収集の難しさ][発表時の意見交換の困難さ][グループワークに対する関心の増大][討論時の「傾聴」と「発言」の大切さの理解][グループワークの困難さの自覚]である。これらから、大学で学ぶための基礎的学修技法や、態度など多くの理解があったことが確認された。

さらに、問題点であり且つ今後の課題として、学習目標をわかりやすくするや、運営・進行の検討の必要性、発表形式と進行方法の検討、発表時の意見交換についての教授等の検討が必要であること、学生のグループ活動をプラスの方向に導くには教員間の話し合いが必要であることなどが示唆された。

キーワード：ゼミナール グループワーク アカデミック・スキズ プレゼンテーション

はじめに

ゼミナールは、1960年代にドイツの大学で発生したものとされ、選ばれた一部の学生が教授の自宅で輪読会をしたものであった¹⁾。

その後その教育方法としての有用性が認められ、一般学生にも開放された。日本では、マスプロ教育の補充としてはじまり、今では、大学における講義とならぶ授業の一形式となってい

る²⁾。ゼミナールの形態的分類には、教養ゼミナール(基礎ゼミ、大学入門ゼミ、フレッシュマン・セミナーなどとも呼ばれる)、専門教育の入門で実施されるプロゼミ(これが基礎ゼミと呼ばれる場合もある)、専門教育のなかで実施される専門ゼミ(プロゼミに対して、本ゼミとも呼ばれる)の3つがある。また方法による分類では、テキストの輪読を行うもの、各自の研

究テーマで発表するもの、フィールドワークや共同制作を行うもの、ディベート方式を取り入れたものなどがある³⁾。文科系の大学では、講義、卒論指導、そしてゼミナールが教育の3つの仕事とも言われる⁴⁾。

看護系大学のゼミナールの報告は、少なく、ほとんどが2年生から行われるフィジカルアセスメントの学習のための実践報告である⁵⁾。1年次に基礎ゼミナールと称しての報告はほとんど無く、看護系の大学が基礎ゼミナールをカリキュラムに入れているかの報告は見当たらない。

本学部では学生にきめ細かな指導を行うために、少人数制の指導が可能なゼミナールを1年次と4年次に配し、1年次は基礎ゼミナール、4年次は専門ゼミナールとした。基礎ゼミナールは、テーマについて討議し、発表すること、プレゼンテーション方法を体得することを目標としている(資料1)。運営方法は、1グループ学生7名～8名で、10グループとし、1グループを2名の教員が担当し、テーマ、進行などその運営に細かい規程は設けず、教員の自由とした。最終日に、ポスターセッションによる発表会を実施した。高等学校を卒業したばかりの学生が、初めて経験する授業形態であり、文献の検索や、毎回の発表用のまとめ方も初めてであり、戸惑う姿が見受けられた。また、教員も大学4年生の専門科目のゼミナールの経験はあるが、1年生のゼミナールの経験は無い教員もいた。開学初年度であり、学生も教員も十分な準備には若干不足のある状態ではじめたというのが実情である。

そこで、今回は、ゼミナール終了後に学生が記入した感想や、意見を基に、学生の理解と、運営の問題点について考え、次年度からの運営の資料とする。

I. 目的

基礎ゼミナールに対する学生の感想・意見から、学生の理解内容と、今後の問題点について考察し、次年度からの基礎ゼミナール運営の資料とする。

II. 方法

対象学生99名。質問紙は、発表終了後の自己評価表と感想・意見を記入する欄を設けた用紙を作成した。感想・意見の欄は、初回であり、多くの意見を得るため自由記述式とした。分析方法は、Berelson. Bの内容分析でカテゴリに分類する点までを参考にした。主語と述語からなり、意味が分かる文章を1記録単位とし、内容の類似性に従い分類し、カテゴリ化した⁶⁾。分類と命名は、専門の教員2名で確認した。

2. 言葉の定義

アカデミック・スキルズ⁷⁾は、学問の目指すより幅広く深い教養を身につけるための基礎的技術、大学で学ぶための基礎的技法であり、教養ではなく、これから一生かけて築いていく幅広く深い教養を積み上げるための、基礎となるものである。

III. 倫理への配慮

ゼミナールの感想・意見は、自己評価の用紙の下の部分に設けた。そこには、まとめて次年度の参考と、報告の資料にすること。教科目の評価には影響することは無いことを明記し、使用することへの同意の有無を記入してもらった。さらに、感想・意見は記入したら、自分で切り離し、指示した箱に、学生自身が投函することで、個人を特定することは無く、尚且つ、投函したことで同意を得たものとした。

IV. 結果

感想・意見を書いた用紙の回収数58、回収率58.6%であった。＜アカデミック・スキルズの習得＞、＜グループワークへの関心と、困難さの自覚＞の2つのカテゴリと、10のサブカテゴリ、79記録単位としてまとめられた(表2)。以下に、カテゴリ別に、学生の理解について述べる(カテゴリ名を【 】、サブカテゴリを〔 〕で示す)。

1. 【アカデミック・スキルズの習得】

最も多くの意見が出されたのは、〔発表への興味や関心の増大〕であった。具体的な意見には、グループにより内容が全く違いとても勉強

になったや、人の前で発表する難しさを知ったという意見があった。しかし、全ての発表を聞く希望や、発表時間を長くしてほしい、などが最も多かった。次に多かったのは、[プレゼンテーションのスキルの習得]であった。ここでは、アンケート作成方法、パソコンのエクセル表計ソフトを使ったこと、プレゼンテーションの仕方などの学びがあり、毎回のグループ内での発表や、全体の発表において、技術的な点も含め、充実感や達成感があったことが挙げられた。次に多いのは[テーマの設定の難しさ]についてであった。具体的には、身近なテーマを調べると深い学びがあったことや、何もないところから、テーマを決めて進めていく作業は新鮮だったなどの学びが挙げられた。一方、テーマを決めることの難しさや、もっと自分たちで考えたテーマで発表したかったなどが挙げられた。次に、[課題を追求することへの関心の増大]について挙げられた。具体的には、調べることの楽しさや、たくさんの本や文献を読み発表するのは大変だが、達成感があるなどの意見が挙げられた。[学習内容の満足]については、各グループのテーマについての学習活動が満足したという意見が挙げられた。次に[文献検索・情報収集の難しさ]については、文献の調べ方の難しさや、資料が少なく調べるのが大変だった、という意見であった。一方、図書館で本を探すのが楽しかったという意見があった。最後に、最終日のプレゼンテーションにおける意見交換に関する意見として、[意見交換の困難性]について、2記録単位が挙げられた。具体的には、全体発表時において、教員からの質問や意見について、テーマを否定された、や、何か言われるのは残念、というものであった。

2. 【グループワーク学習への関心と困難さの自覚】

最も多い意見は[グループワークに対する関心の増大]であった。信頼関係やコミュニケーションの重要性の認識や、いつもいる人とは違う友達が増えてよかった、などが挙げられた。次に[討論時の「傾聴」と「発言」の大切さの理解]についての意見であり、自分の意見をメン

バーに伝えるのが、一番自分に欠けていると認識したなどであった。次に[グループワークの困難さの自覚]であり、リーダーをして、メンバーをまとめることの難しさの学びが挙げられた。一方、作業の不平等さを挙げた意見が3記録単位と、半数を占めた。

V. 考察

ほとんどの学生は、ゼミナールは初めて体験する学習形態であり、講義法とは違って、担当教員からの継続的指導のもと、学生が主体的・能動的にメンバーと共調して進める活動である。そのため学生の戸惑いも大きいと予測されたが、学生からは多くの理解や気づきを得たという意見が挙げられた。

一方、今後の運営の問題として、意見の多い順に4点挙げられる。その問題点として、[テーマの設定の難しさ]の意見から、テーマの設定の問題。[発表の興味や関心の増大]の中から、全体発表の進行について。3点目に、[発表時の意見交換の困難さ]について。そして4点目として、[グループワークの困難さの自覚]から、作業の不平等についてである。これらの点について考察をする。

1. テーマの設定

学生のテーマへの意見から、ゼミナールの進め方が統一されていなかったことが推測される。ゼミナールの定義は、小山⁸⁾によると「ある課題について指導者が統率をもってそのグループの意見なり、見解をまとめていく方法である。学生は課題に関連する事項について自分たちで調べたことを発表したり、討議しあうという能動的役割をとる」方法であるが、はじめに述べたように、いろいろな形態がある。毛利⁹⁾の報告でも、教育学部の1年生の58のゼミのうち、テキストの輪読は11、グループ活動をとりいれたゼミが27、他は個人の活動中心であり、いろいろな方法であった。したがって、当学部の基礎ゼミナールに於いて、教員が示したテーマで学習することは何ら問題ではない。しかし、学生の「自分たちで決めたかった」という意見が多いことは、いろいろなゼミの進行に不満が

残ったと考えられる。

ゼミの進行やテーマに関係するのは、ゼミでは何をねらいとしているかという、ゼミの目的による。皆川¹⁰⁾は「理想とするのは他人の意見を聞き、それを理解した上で自分の意見を述べる、というゼミ形式を早い時期に経験することにより、講義のみでは獲得しにくい能動的な学習姿勢を身につけさせることである¹¹⁾」が、入学直後の1年生に適応するのは困難で、現実的には『発言させるための訓練を行う』ことを半年間での到達目標にしたと述べている。その点で当学部の基礎ゼミの目的が、コミュニケーション力の向上、文献検索スキルの向上、情報をまとめる力の向上、プレゼンテーション力の向上など、1年生の前期の学生にとっては、多くを求めすぎているとも考えられる(資料1)。当学部でも、学生の質や教員の得手不得手、時期などを考慮し決めることが必要であろう。

しかし、テーマが何であれ、学生の意見に挙がった「基礎ゼミの初めは、意味が分からなかったが、先生方の提示してくれたものを確実にこなしていけば、力がついていることが徐々に分かる」という『学びの姿勢を学ぶ』ことは、大学教育としては重要である。その自信は、今後の学習に役立つであろう。こうした学びを得ることを目指すためにも、目的を熟考することが必要であろう。

2. 全体発表の進行

全体のポスターセッションによる発表では、内容や形式は自由としたが、ほとんどの発表が、研究報告のような形式となっていた。それは、動機・目的・方法・結果・考察などの項目に沿ってまとめられていた。研究の科目も学んでいないうちに、形式だけを真似るのは学習の積み重ねがない1年生では、その意味することの理解があいまいのままになり、決して推奨されるものではない。しかし、この点に関しては、先にのべたテーマの設定と進行に密接に関係するところであり、重要な課題である。

さらに、5分で発表する難しさもあった。発表時間が短いほど、説得力をもって言える内容と言葉を、あらかじめ精査、整理し、練習を重

ねておかなければならない¹²⁾。科目の責任者として、90分の中で、全発表を見てほしいという意図で行ったが、学生の指摘にあるように、発表形式についての説明上の問題で、学生に周知し得なかったという点は、発表形式と共に今後も検討する点であろう。

3. 意見交換の難しさ

全体発表時に、担当した教員ではなく、他の教員からの質問や意見を「批判された、否定された」と感じていた。一生懸命やってきたことを、まず、ほめてもらいたいという意見である。ディスカッション¹³⁾は、質問者が疑問点などを発表者に問いかけ、資料の読み方、解釈、論証について、良かった点や問題と思われる点を指摘して、発表者の意見を問うものである。今回、教員はあら捜しをしたわけではなく、教員も一生懸命であったであろう。しかし、その時の語気や、言葉自体が厳しくなり、学生には批判と感じられたのであろう。今後の学習の多くの機会に、発表し議論しあうことも、重要な学習であることを伝え、また、教員も態度・言葉使いを含め、モデリングとなることを認識することが必要であろう。

4. グループ活動内の作業の不平等さに関して

グループワークで感じる困難についての調査があり¹⁴⁾、それには、メンバーに自分の意見を発言する困難、メンバーと合意を得ることの困難、メンバー間の協調に関する困難、グループワークの目的把握と進め方に対する困難、を挙げている。これらが困難になる要因の一つに、青年期の特徴が挙げられる。青年期は、自分自身の価値観と他者からの期待の中で葛藤し、自己を確立してゆく時期である。そのため、クラスメートが自分をどのように評価するのか気になる、発言することに困難を感じることもあると考えられている。また、同様に、できるだけ衝突を避け、表面的に穏便な人間関係を良とする傾向がある¹⁵⁾。このような状況では、教員の適切な働きかけが無いとマイナス方向の「同調」と他人任せにより、低調なものに終わる可能性が高い¹⁶⁾。プラス方向の「同調」を促しながら、全体のやる気を高めてゆけるような働きかけが

求められるのである。そして、グループワークの中では、情報を得る・調べる・グループ内でのまとめをする・全体発表の時のまとめ・資料の作成など、多くの作業があっても、いつも実施する人が同じだったりすることは誰しもが経験することである。今回のゼミナールでもそのような作業量の不平等があったのだろう。教員も、そのような集団の扱いに関して習熟しているわけではない。したがって、運営の方法や問題点など、さまざまな経験を持つ教員間のミーティングなどが必要であろう。

一方、学生は「活発にディスカッションが出来た」と述べている。学生からの一方的な見解ではあるが、その活発さの程度と、内容を問うより、まずは話が出来、視野が広まったという実感を得、「グループワークが好きになった」と思える体験は貴重である。ただ、「他人と話すのが非常に苦手」とする学生にも、居心地のよい場所としてのゼミの存在も、1年生の初期には必要であり、進行の工夫の重要性が示唆された。

VI. 結論

基礎ゼミナールに対する学生の感想や意見から、理解したことについて、【アカデミック・スキルズの習得】、【グループワーク学習への関心と、困難さの自覚】の2つのカテゴリと、[発表に対する興味・関心の増大]、[プレゼンテーションスキルの習得]、[テーマ設定の難しさ]、[課題を追求することへの関心の増大]、[学習内容の満足]、[文献検索・情報収集法の難しさ]、[意見交換の困難さ]、[グループワークに対する関心の増大]、[討論時の「傾聴」と「発言」の大切さの理解]、[グループワークの困難さの自覚]の10のサブカテゴリが抽出された。

さらに、学生の意見から、今後の基礎ゼミナール運営の課題として、学習目標とともにテーマの設定・進行について検討が必要であることや、発表形式と方法の検討、そして、グループの活動をプラスの方向に導くためには、教員の適切な働きかけが必要であり、そのためには、教員の話し合いが必要であることが示唆された。これらを検討し、次年度からの基礎ゼ

ミナールの運営を試みたい。

引用文献

- 1) 毛利 猛：ゼミナールの臨床教育学のために、香川大学教育実践総合研究12, p29, 2006.
- 2) 福原紀彦他：いま「ゼミ」を熱く語る，大学時報，日本私立大学連盟，No.314, p14-29, 2007.
- 3) 毛利 猛：ゼミナールの臨床教育学のために，香川大学教育実践総合研究，12, p31-32, 2006.
- 4) 毛利 猛：ゼミナールの臨床教育学のために，香川大学教育実践総合研究，12, p 29, 2006.
- 5) 松浦治代・大庭桂子他：看護ゼミナールの評価と今後，看護展望，Vol.32 No.12, p 1172-1177, 2007.
- 6) 舟島なをみ：質的研究への挑戦，医学書院，p42-53, 2000.
- 7) 佐藤望編著・湯川武・横山千晶・近藤明彦：アカデミック・スキルズ，慶應義塾大学出版会，p10, 2007.
- 8) 小山真理子：効果的なグループ学習を促進するための教師のかかわり，Quality Nursing, 1(9), 23-27, 1995.
- 9) 毛利 猛：ゼミナールの臨床教育学のために，香川大学教育実践総合研究，12, p32, 2006.
- 10) 皆川 雅章：基礎ゼミナール I において学生の発言を促す試み，社会情報，Vol.14 No1, p109-122, 2004.
- 11) 森田彦・吉野巖他：社会情報学基礎ゼミナールにおける取り組み，社会情報，Vol.7 No2, p29-45, 1998.
- 12) 諸岡明美・菅谷しづ子：ポスターセッションを用いたグループワークの学習効果，看護教育，Vol.46(7), p580-586, 2005.
- 13) 佐藤望編著・湯川武・横山千晶・近藤明彦：アカデミック・スキルズ，慶應義塾大学出版会，p130-131, 2007.
- 14) 藤野ユリ子：看護学生がグループワークで感じる困難と満足との関係，日本看護学教育学会誌，Vol.15(1), p1-13, 2005.

- 15) 伊藤美奈子：個人志向性と社会志向性と意欲，現代のエスプリ333号，p176-187，至文堂，1995.
- 16) 毛利 猛：ゼミナールの臨床教育学のために，香川大学教育実践総合研究，12，p34，2006.

参考文献

- 1) 伊藤義之：基礎ゼミナール試論，総合教育研究センター紀要，Vol.4，p25-37，2005.
- 2) 井上芳保：大学教育における「学び」の基本を培うために-基礎ゼミナールの担当教員としての経験を中心に-，社会情報，Vol.13 No.2，p125-138，2004.
- 3) 尾崎康弘・高橋史朗：教科目「情報基礎ゼミナール」に関する一考察，八戸工業大学紀要，Vol.23，p201-204，2003.
- 4) 鳴澤實：若者達と対人関係ストレス 一般大学の教育の立場から，日本看護学教育学会誌，9(4)，p42-45，2002.
- 5) John Wilkinson, Chistine Wilkinson：Group discussions in nursing education a leaning process，Nursing Standad，10(44)，p46-47，1996.
- 6) B. G. Davis, L. Wood and R. Wilson, 香取草之助監訳：ABC's of teaching with Excellence，授業をどうする カリフォルニア大学バークレー校の授業改善のためのアイデア集，東海大学出版会，2005.
- 7) Peter J. Gosling著，徳田耕一・北村房男訳：科学者のためのポスターセッションガイド，丸善，2003.
- 8) 井上大樹・淀野順子：基礎ゼミナールⅡにおける学生の「学び」(3)，一クラス内の関係性と学習の展開一，社会情報，Vol.15 No2，p159-176，2006.

資料1 基礎ゼミナールの運営

1. 基礎ゼミナールの運営

<一般学習目標>

1. 課題を考え討議し、発表するまでに主体的学習方法を理解する。
2. 課題を討議するための情報収集や、討議などにより多方面から考えることの重要性を理解する。
3. グループディスカッションにより、意見を聞く姿勢や、考えを述べる能力を養う。
4. 討議・まとめ・発表をするなかで、プレゼンテーション方法を体得する。

<行動目標>

1. 1つの課題について、様々な方面から情報を収集することができる。
2. 収集した情報を理解し、統合することができる。
3. グループディスカッションのなかで、他者の意見を聞くことができる。
4. グループディスカッションのなかで、自分の考えを適切に述べるすることができる。
5. グループでまとめた成果を、プレゼンテーション及び文書でわかりやすく表現することができる。

<時期・時間> 平成19年4月～12月まで、29コマ。平成19年12月4日発表会を実施し、終了。

<ゼミナールの進め方> 全学生を10グループ（1グループ10名～11名）に分け、2名の教員が担当した。進め方は、12月に発表すること、テーマや方法などはグループの自由とした。病院や、外部の施設などを利用する場合、事前に学部長へ申請することを周知した。

<図書館の使用法のレクチャー>

図書館の司書により、蔵書検索（OPAC）や、大学におけるレポートの書き方、文献検索の方法、図書館の利用法などであった。パソコンの使い方は、2セメスタ-の情報処理演習の科目に委ねた。

<発表会> 平成19年12月4日、am9:00～10:30。ポスターセッション形式。3つの教室を使用し、1グループ5分のプレゼンテーションを実施した。6グループずつ2箇所ですべて同時に発表した。ポスターのボードは夕方まで展示し、自由に見られるようにした。進行・タイムキーパーは学生が担当した（表1）。

表1 基礎ゼミナール発表時のテーマ

1	感情と管理
2	感情 listen to my heart -これであなたの心もわしづかみ-
3	3つの国の出産におけるケア
4	看護師になってゆくための学び
5	血液型と性格の関連性-なぜ信じるのか、知りたがるのか-
6	月経のトラブルと基礎体温
7	病院食について-病院食を作るにあたっての工夫と病気による病院食の違い
8	食文化から見た現代の健康な食事
9	ハーブティとカラーセラピーから考える『癒し』-文献とアンケートに基づく考察-
10	患者参加型医療
11	患者参加型医療・看護
12	変容する家族とその問題

表2 基礎ゼミナールへの学生の感想・意見

(n=79)

カテゴリ名	サブカテゴリ名	記述内容
アカデミック・スキルの習得	発表への興味や関心の増大 13記録単位	・人前で発表する難しさを知った。
		・1年間の学びを通して大変な事が多かったけど、発表後に先生方がほめてくれ、うれしかった。
		・発表時間を長くしてほしいかった。(同意3名)
		・それぞれのグループで別々の研究をしてきて、グループによって発表内容が全く違った。いろいろな発表が見れたので、とても勉強になった。
		・プレゼンテーションの仕方の説明不足(同意見2名)
		・発表ですべてのゼミの内容が聞きたかった。(同意見2名)
	プレゼンテーションスキルの習得 10記録単位	・レジュメの作成や、プレゼンテーション、ディスカッションの仕方など、とても勉強になった。
		・文献、資料からの学び方、プレゼンテーションの仕方、発表の仕方など多くのことを学んだ。(同意見3名)
		・文献の調べ方、アンケートの作り方、エクセルの使い方など学べた。
		・この1年で、だいぶパソコンが上達した。
		・初めて発表の資料・ポスターを作ることが難しかったが、達成感がある。
		・発表をすることによって達成感に満たされ、自分達の今までやってきたことがよかったのだと実感できてよかった
	テーマ設定の難しさ 8記録単位	・(発表時)先生方に質問されて、まだ未熟な面も感じた。
		・何もないことから、1から話し合い、テーマを決めて進めていく作業は新鮮でした。
		・自分たちが調べたテーマは、身近なものだけど調べてみると奥が深くて調べれば調べるほど、理解をするのに難しかった。
		・テーマを決めることの難しさが分かった。
	課題を追求することへの関心の増大 9記録単位	・もっと自分達で考えたテーマで発表したかった。(同意見4名)
		・1年間のゼミを通して1つの物事を深く追求していくことの楽しさと苦労を知った。
		・教員が紹介してくれたたたくさんの本・資料を読み、その読み方、意見の言い方、司会の仕方、レポートの書き方、などこれから役に立つ事の多くを学べたことはとても自分のためになった。
		・基礎ゼミをやり始めた頃は、本当に意味のあることなのかと疑問に思っていたが、先生方の提示して下さったものを確実にこなしていけば力がついていることが徐々に分かった。
・「長い時間をかけて、1つのものを掘り下げていく」という点については、とても充実していた		
・自分の意見をしっかり持たないと、ディベートに参加できないので、予習、復習が大切なことも学べた。		
・習っていないことを調べてまとめるのはすごく大変で難しかったけど、やり終えた時は達成感があり、うれしかった		
・調べるにつれ、更なる疑問が浮かんでくることに感銘を受けた。		
・資料をたくさん読み、それについてたくさんのお話を聞くことができ、多くのことを学んだ。		
・ゼミによっては、夜遅くまで大学で討論をしていたり、レポート漬けになったりしている。		

カテゴリ名	サブカテゴリ名	記述内容	
アカデミック・スキルの習得	学習内容の満足 5 記録単位	・女性の体のしくみ（月経）については、前から気になっていたことなので、今回調べたことで様々な知識を得た。	
		・「管理される心」という本を読んで、理解するのに時間がかかり、とても難しかったが、とても勉強になりました。	
		・病院食がどのようなものであるか、病院食が患者さんにとって大切なものであるなど、とても勉強になった。（同意見2名）	
	文献検索・情報収集法の難しさ 4 記録単位	・参考文献を調べる大変さがわかった。	
		・調査をはじめた時は、資料があまり見つからなくて大変だった。回を重ねていくうちに資料が見つかったので良かった。	
		・図書館で本を探すのが楽しかった。	
	発表時の意見交換の困難さ 2 記録単位	・資料があまりなくて、調べる事が大変だった。	
		・先日の発表においても、ある先生からはけなされるような言い方をされました。私たちは、ゼミの担当の先生と話し合ったり、相談したりしながら一生懸命やってきたのに、テーマを根本的に否定されたのがとてもくやしかったです。	
	グループワーク学習への関心と困難さの自覚	グループワークに対する関心の増大 13記録単位	・せっかく頑張ったのに、発表時、何か言われるのは残念。それなら、初めから共通したテーマなどを決めてほしかった。
			・少人数のため、まとまりがあってやりやすく感じた。
・グループ別に学習するのは良かった。			
・グループ内での絆が深まったように思えたのでいい授業だったと思う。（同意見3名）			
・基礎ゼミの人と、いつも一緒にいるメンバーが違うので、友達が増えてよかった。			
・グループワークが好きになった。			
・グループ内の信頼関係やコミュニケーションが欠かせないと確認した。			
討論時の「傾聴」と「発言」の大切さの理解 9 記録単位		・自分をとても成長させてくれた場でした。（同意見3名）	
		・人の意見をきいた上で自分の意見を主張するやり方など、いろんな事が学べてよかった。（同意見2名）	
		・自分の意見や考えを言葉できちんと他のメンバーに伝えることが自分に一番欠けていることだと改めて認識された。	
グループワークの困難さの自覚 6 記録単位	・活発にディスカッションできたので、様々な意見が聞けて、知識が深まり、また視野が広がった。（同意見2名）		
	・リーダーではないのに、リーダーシップをとっていたため、みんなの意見を聞きたいと思っても、なかなか意見がでなかったりして、メンバーをまとめることが難しいことだと学びました。（同意見1名）		
	・実施中には、誰かに負担がかかる。		
	・今までこんな長くグループワークをしたことがなかったので、グループのメンバーとどう接していけばいいのか不安だった。		
		・グループ内の数名はいつまで経っても協調性を見せることはなく、それだけでも迷惑していたのに、自発性も全く無く、困りものだった。	
		・配分があまりに平等でなく、今までゼミにまるで参加してこなかった人が参考文献を打つだけで良いという簡単なものであった。	